

2024年度

佐賀大学学校推薦型選抜Ⅰ試験問題

教育学部

学校教育課程

(幼小連携教育コース)

小論文

解答上の注意事項

- 1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。
- 2 「解答始め」の合図があったら、解答紙の所定欄に受験番号、氏名を記入すること。
- 3 問題の解答は、別に指示がある場合を除き、所定の解答欄に記入すること。
- 4 問題について、疑問がある場合は、手を挙げて質問を行うこと。
- 5 問題紙、下書き用紙は持ち帰ってはならない。
- 6 その他、監督者の指示に従うこと。

【問】以下の文章は、ある小学校教員が自身の実践を振り返ったものです。下線部にについて、1人ひとりの多様性に寄り添うために、どのようなシステムを教室に創り、教育・指導をすればよいのか、あなたの考えを800字以内で論じなさい。

たとえば、「手や足が不自由」だとか、「長時間じっとしていることが難しい」など、周りに伝わりやすい多様性には、向き合いやすいですが、教室に30人いれば、30通りの多様性があるのです。そのことをつい見失いがちになることがあります。

また、教室で子どもと向き合うということは、1人ひとりの子どもと直接的な関わりを重ねていくことだと思っています。しかし、現在の教室での物理的、人的状況を考えて、教室にシステムをつくり、それを通して子ども「たち」と向き合うという、間接的な関わりもしていかなければなりません。では、どんなシステムで、子どもたちの多様性と向き合い、インクルーシブな教室を目指せばよいのでしょうか。

そして、子どもたちの「今」だけでなく、「未来」も考えて向き合いたいと思っています。「未来」というよりは、「見通し」に近いかもしれませんが、今このときだけが安心安全に過ごせればよいとは思えないのです。小学校では楽しく過ごせたのに、進学していくと不安定になっていったということがあります（もちろん進学することで、より安定して過ごせるようになったということもあります）。子どもたちがこの先も、安心安全に過ごせる状態が続いていくためには、今のこの教室で、何が必要か。何を考えればよいのか、どことつながっていけばよいのか、ということも考えたいのです。

こう考えると、インクルーシブな教室に向かう「プロセス」は、とてつもない道のりです。それでも、この「プロセス」を手放したくありません。この「プロセス」は、たくさんのかたちを教えた子どもたちや保護者が、そして、自分自身も安心安全に過ごせるための「プロセス」であり、私たちが暮らす社会を創っていくという「プロセス」でもあるからです。だからこそ、そこに自負を持っていたいのです。

「子どもと向き合う」と、私はよく口にしてしまいます。私にとって「向き合う」とは、子どものことを理解「しよう」とし、子どもが安心安全に過ごすために、どんな関わりが必要なのかと考えることなのですが、実際に向き合えているのかどうかは、かなり難しいことだと思うことがよくあります。

忘れられない場面があります。ある年の朝の会のことです。ペアになって、今日1日の過ごし方を対話するプログラムがありました。あまり対話をしてこなかった人とペアになることがクラスで共有されていたのですが、2人の子どもがペアになれず立ったままでした。ですから、2人のどちらかが動いたり、声をかけたりすればペアになれたのですが、それぞれの子の特性で、そうした行動が難しかったのです。それに気づいた周りの子たちが声を出したり、立っている子をもう1人のところに連れて行ってあげたりして、ペアになることができました。

この場面は、本当に考えさせられました。2人にとって、このような場面の経験を積んでいくことに意味があるのか。この経験をすることで、2人はしんどい思いをしないか。周りの子たちは2人の状況を理解し、サポートしてくれているけれど、そのサポートは、この教室だけで完結してしまわないか。だとしたら、どんな形のサポートがあるとよいのだろう。など、いろいろな思いが生まれました。そこで私がやらなければならなかったことは、私がその場で感じたこと、考えたことを2人に伝え、どう思っているかを聞くことでした。そして、2人から聞かされたのは、やっぱりあの状況は避けたいという思いでした。

子どもたち1人ひとりと、それなりに向き合えていると思っていました。子どもたちにとってよかれと思って、いろいろと取り組んでいました。しかし、そうではない側面があったのです。心が苦しくなりました。でも、それ以上に、2人は苦しい思いをきっとしていたのだし、私が気づかなかっただけで、これまでも同じような苦しい思いをしてきた子もいたのだろうと思います。私の力量と今の教室を取り巻く環境では、1人ひとりの多様性に応える形にすることは難しいけれど、何かできること、すべきことはないかと考えました。

出典：野口晃菜・喜多一馬編著（2022）『差別のない社会をつくるインクルーシブ教育－誰のことばにも同じだけ価値がある』、学事出版、pp.174-176

※出題に際して、一部を抜粋・修正を行った。

大野睦仁 「向き合うことで見えた「プロセス」からインクルーシブな教室」
野口晃菜・喜多一馬（2022）編著『差別のない社会をつくるインクルーシブ教育』、学事出版、pp.174-176